

「三宝通信」法話

浄土宗 天上山 大念寺
住職 大島祥明



死によってほんとうの「本人」が現れる

靈魂を実感すると、「死ぬ」ということは、身体と魂とが離れる状態」だということがわかります。そして、身体はこの世から滅することになります。けれども、**死んでも「本人」は消滅しないはずなんです。**

身体というのは、あくまでこの世の借り物・乗り物なのです。そして、身体がなくなった状態こそが、その人の本質的な姿だと思います。人間は身体がある状態、つまり生きている状態では、なかなかその人の本質はあらわになっておりません。生きているときには、世間的な権威とか肩書きとか、そういった役割みたいなものによって自分をかたちづけています。

また、接触する人によって対応も変わります。内心は傲慢でも外面的には誠実な人柄としてふるまっていたり、内心は臆病でも剛毅な性格を装っていたりすることもあります。生きていくときは、その人の本質は、外面的な身体によってカムフラージュされているようなものです。

ところが、死によって身体と離れると、「本人」だけになります。外面の被い取り除かれて「本人」だけになるのです。

そのとき、裸になったほんとうの「本人」が現れるのです。死によって、自分を押さえつけていたもの、規制していた枠が外れるでしょう。その本人の本質があらわになるわけですから、**私が実感するのは、その「本人」という本質的な部分なのです。**そして、私が「本人」をより強く実感するのは、やはり「本人」が長くいた場所です。しかも、死の直後なのです。身体から離れたものを、俗に「靈魂」「たましい」というわけですが、私は「本人」とよんでいます。その「本人」をわかる人もいるし、わからない人もいます。わからない人が、ほとんどだと思います。

私は、死後も「本人」が実在することを、「信じなき」とも言いません。また、「わかるからいい」とか「わからないから悪い」ということもあります。むしろ、わからないほうがいい場合すらあります。わからない人、死んだらそれで終わりだと思える人は、あるいは薬だとも言えます。「本人」がわかる人は、少々重荷を背負うことになるからです。

なぜなら、こちらで**靈がなにかを訴えかけているのがわかる**と、**靈のほうもこちらが「自分のことを理解してくれている」と感じる**でしょう。すると、「なんとかしてもらいたい」とか**かわって**くることがあるからです。私もときどき靈にしがみつかれたり、よりかかれそうになることがあります。そのときには、心身ともかなりきついものです。だから自分に靈に**応えるだけの力量と覚悟が備わっていない**ければ、**不必要に靈に悩まされる**ことにもなりかねないのです。